

園の特色を活かした地震防災保育の事例研究

—— 育ち合いから学びをつなぐ ——

Case Study of Earthquake Disaster Mitigation Education Utilizing Characteristics of Nursery School

山田 伸之
Nobuyuki YAMADA
(高知大学理工学部)

丁子 かおる
Kaoru CHOJI
(和歌山大学教育学部)

馬場 訓子
Noriko BABA
(くらしき作陽大学子ども教育学部)

高橋 敏之
Toshiyuki TAKAHASHI
(岡山大学教育学部)

2019年10月8日受理

要旨

教育現場における防災に関わる取り組みや研究はさかんに行われるようになってきているが、保育園・認定こども園・幼稚園を対象とした研究は、小中学校などの事例に比べて少ない。乳幼児の通う園における防災を含んだ身の回りの安全に関する事項の教育や保育には、一過的な防災訓練としてよりも園の特色を活かしながら、日常生活の育ちの中から学びに繋げることが重要であり、乳幼児とその周りの大人と一緒に取り込んだものにする必要がある。本報では、こうした点を考慮した模擬体験を含んだ地震防災保育を、「育ち合い」を大切にすかぜのこ保育園(和歌山市に立地)との連携で実践を行い、実践結果をアンケート結果とともに報告する。これらによって、地震防災保育の質の向上のための知見を得ることができ、今後の課題も明らかにすることができた。

キーワード：防災保育、保育園、地震防災、模擬体験

1. はじめに

教育・保育現場での安全教育については、数年前よりは様々な取り組みが存在しているが、地震防災教育に関する内容については、避難訓練をベースにしたものが中心である。小中学校などでは、学年に応じた防災教育の拡充もなされ、地域の実状に対応した様々な工夫をした取り組みが存在する。例えば、文部科学省(2013)では防災教育に関する詳細な資料が作成されている。保育園や幼稚園におけるその実践例[例えば、阿部・目黒(2005)、高橋(2008)]も存在するが数は多くない。保育園や幼稚園などの乳幼児を対象にした防災教育については、大半が避難訓練を実施することのみに主眼が置かれることが多い。いわば義務的に実施するに留まるため、園の1つの行事としての扱いになり、形骸化しているケースが散見される。後述する最新の各種教育要領や保育指針(解説を含む)では、園における健康・安全に関わる項を設け、防災保育の取り扱いが必須であると明記し、今後、防災保育の質的向上が望まれている。また、自然災害が頻発する現状においては、早急な展開を要する内容でもある。

本報告では、著者らが10年以上継続的に取り組む保

育園・幼稚園での防災保育の実践活動のうち、和歌山市に立地するかぜのこ保育園(園児数80名)での実践(実施日2019年2月19日)について報告する。実践園は、大規模地震災害の発生が危惧される地域の一つである和歌山県北部地域にある私立保育施設である。ここでの実践事例をもとに、防災保育の質的改善と今後の防災保育への新たな方向性についての議論を高め、新たな展開をしたいと考えている。

ここでは、乳幼児たちの育ちをサポートし、生活の中にある防災教育を包含して「防災保育」と呼んでいる。著者の山田と丁子は、2011年東日本大震災発生の前にエントリーしていた日本保育学会第65回大会[山田・丁子(2012)]で「防災保育」の言葉をすでに使用している。「防災保育」の言葉は数年前までほとんど見られなかったが、最近の保育学会の資料等でも散見されることから、一般的に認知された言葉として用いても差し支えないと考えられる。

2. 災害と保育がリンクする既往の研究

近年の自然災害の頻度と深刻度から災害への危機意識が高まりつつある。そのような中で、最も幼い発達

過程を対象とする保育関係者にとって、災害時にどのような行動を取り、幼い命を守り抜くか、被災後の保育をどう再開するか、日頃の防災訓練をどう進めていくか等は、恒久的問題である。「災害時の子どもと保育」は、今後も非常に重要な研究主題として、幼児教育研究者と保育実践者による実践と経験に基づく研究や報告が不可欠である。将来的には、それらの効果をより補間・実証する客観的・科学的な研究も必要であろう。

既往の研究成果の中から、「災害×保育」の両者が関連する文献を概観すると、例えば、石井ほか(2011)、本郷ほか(2013)、中野ほか(2014)、佐々木(2016)などがあり、地震など各種災害時の保育施設の対応や保育事業継続に関する内容が記されている。また、例えば、地域安全学会の『東日本大震災特別論文集』には、総数152編の多様な論文が掲載されているが、保育関係の論文は、佐藤・村山(2017)と水田(2018)のわずか2編である。

2011年の東日本大震災を経て、災害と保育に関連する研究は増えつつあるものの、未だ限定的である。これらの研究主題は、保育施設の運営・対応、保育実践、災害への準備など概して保育者等の大人の目線によるものが多い。今後、こうした自然災害時の保育に関わる問題や課題などを考慮した実践的研究が望まれる。

3. 教育要領等から読み解く地震防災保育の意義

最新の『幼稚園教育要領解説：文部科学省(2018)』『保育所保育指針解説：厚生労働省(2018)』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説：内閣府(2018)』では、改訂前よりも①防災教育と②災害時対応に関する内容の拡充がなされ、保育施設における具体的かつ実効的な責任ある行動が求められるようになったと言える。こうした点から、前者①の一つの見方として、「子どもたちの災害時の適切な対応力(自分の身を自ら守る力)」をつけるために、発達過程に沿った防災保育をどのような形で具現化していくのかが鍵になると考えられる。それらを達成するため、防災保育の各パーツである防災マニュアル・役割分担、年間指導計画に位置づけられる避難訓練などの適切な実施や整備とPDCAサイクルの循環を実現することは重要である。精度の高い災害の予測は極めて困難であることから、定期的な避難訓練を単なる園の行事として捉えるのではなく、災害は日常生活の延長上にあるものとして捉えることも必要である。この点においては、保育者および園の管理者の意識改革を要するものでもある(後者②)。また、防災に関する内容は、日常生活の中で子どもたちの育ちへの貢献が大きく、育ちを促す可能性を秘めていると考えられることから、この点も鑑み「防災保育」が必要である。そのためには、園生活だけではなく、家庭との連携、自治体や地域との連携を図ることを意識して、普段の保育の中での培って

ることが必要である。子どもたちだけでなく、保育者・保護者など周りの大人も災害への対応力をつけていけるような機会を通じて、園の防災対策に対する不十分な点を改善させ、園全体を内包した地域の防災力の向上が期待できる。

従って、これまでの防災保育の実践における良い点悪い点の分析を踏まえつつ、質的な向上を視野に入れた「望ましい防災保育の姿」を模索していくことは必要であることから、本報告では、具体的な保育実践を、一例として詳述し、その課題に迫る。

4. 防災保育の実態と背景

前述したように防災教育(保育)について、多様な取り組みが存在し、2011年の東日本大震災を経て、更なる積極的な取り組みが行われてきている。例えば、天野(2017)では、保育者への避難訓練の様々な取り組み方の例示や多くの被災時の経験談が記されている。著者らも、先の震災前より各種学校・園での防災保育等を実施してきており[例えば、山田・丁子(2016、2018)やYamada and Choji(2017)]、防災保育に関する各種データだけでなく、その実践的な知見や技術および園との信頼関係のネットワークも構築・蓄積されてきている。

また、2018年度より施行されている『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、領域「健康」において避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすることが明文化され、また、『保育所保育指針』や『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』及びその解説では「災害への備え」の項が新設され、安全点検や環境の整備、災害発生時の対応や避難について定期的な避難訓練とその計画、職員の役割分担、保護者との連携等が従来よりも具体的に求められて記載がされるようになった。なお、小学校学習指導要領[文部科学省(2017)]においては4年生の社会科での地方公共団体の働きや地域の人々による災害対応、5、6年生の理科での生命・地球で自然災害についての内容が以前より改善・充実がされた。このようにして学校・園における防災対策と年齢に応じた災害に対応する教育の拡充が進行している。

こうした学校教育・保育現場における防災教育への意識は、高まっているものの保育の現場では避難訓練等で、園舎内での身を守るための指導や園舎外への避難といった行動をとること以外に、「具体的に何をしたらよいのか分からない」という声が聞かれ、特に、日常の中で地震の揺れを経験することが少ない地域では、保育者や保護者など大人でさえも、地震時のとっさの対応のしかたを十分に知らないことも多い。また、地理的問題や立地、園舎等の状況は異なっているにも関わらず、他地域の実践例をそのまま引用するケースや

心情に訴えるのみの活動が散見し、運用面や知識面での危うさがあり、さらに、2011年東日本大震災以降、沿岸部地域に立地する園などでは、津波の怖さのみが強調され、「地震の揺れ」に対して、無防備である面も否めない。さらに、どこかで自然災害が発生すると防災教育は、一気に盛り上がるが、逆にしばらくすると急激に盛り下がる傾向もある。こうした背景から、本研究では、防災保育の継続的で実践的な拡充に寄与することをねらいの一つとしている。

5. 実践園の概要

今回報告する防災保育は、大規模地震災害の発生が危惧される和歌山県にある「かぜのこ保育園」での実践によるものである。この園は、和歌山市の北部の大阪・和歌山県境の標高の高い位置で、閑静な住宅街に立地する。従って、危惧される自然災害としては、斜面災害や地震によるものが考えられる。高台に立地するゆえに、災害時には、ライフラインなどの途絶・回復に時間を要するなど間接的な影響が危惧される。また、住宅街に立地するため、地域住民との連携・共助の深化をあらかじめしておくことも必要である。園舎は、数年前に改修したばかりで新しく、温か味のある木造で構造としても耐震性が考慮されている。園の周囲は、園庭や駐車場であり、広いスペースが確保され、日常の体を動かす活動には十分な広さのみならず、一時避難先としての安全管理上のゆとりも兼ね備えた園である。

実践園は、園児数80名ほどの小規模の園である。前述したように丘の上にあり、山の自然に近く、それに触れあいながら、また、子どもの育ち合いに重きを置いた保育がなされている。園での地震や火災に対する防災訓練は、定期的実施され、室内での行動確認や園舎外(敷地内の駐車場)への移動訓練がなされている。しかしながら、訓練の要素を含んだ体験的な防災保育の実施の経験は子どもも保育者もなく、今回が初めてのことであった。

家庭との連携については、日ごろの取り組みの他、子育て通信の発行や保護者会活動の一つに「学習運動部」として保護者が共に学び考えるための様々な講座も定期的に園では開催をしている。例えば、「かぜのこ保育園のここが聞きたい講座」では、保護者から園の保育方法等の疑問に保育者が答え、考えを共有し合うなど保育者も共に育ち・考える経験を重視している。

保育方針として「育ち合い遊びを通して学び合う」ことを大切にしていることから、学級数は各学年1クラス、3～5歳児は1クラス16人を定員とし、子どもたち一人一人は意見を出し合える環境で生活をしている。登園後は、はだし保育やリズム遊びでしなやかな心と体づくりにも取り組んでおり、自然物を探しに出かけたり、クラスでクッキングをしたり、子どもたち

と保育者で意見を出し合いながら遊びを大切に保育がされている。例えば給食の準備の場面で、子どもたちで声を掛け合って座り、料理の配膳やお椀におつゆを入れるなど年齢に応じてできることは自分たちでしていくなど、子どもが中心でありながら、保育者は丁寧な生活を心がけている様子がある。

過去には、生活発表会の年長児の劇では、当日の大人の多さに驚いてその場で立ちすくんで劇を止めてしまった女児がいたら、クラスの子どもたちとその場で集まり様々な意見を出し合って対策を考えて助け合って乗り越えていく姿もあった。このように、この実践園では、子ども一人一人を尊重した方針である「育ち合い遊びを通して学ぶ」保育を行っている。

6. 防災保育の取り組み実践概要

これまで一連の防災保育実践では、山田・丁子(2016)で示した内容に準ずる図1に示す内容を順に行ってきた。乳児・幼児・児童・生徒たちが劇を見たり、身を守るための姿勢を歌とダンスを交えて学んだり、揺れや煙・暗やみなどを体験したり、危険物から回避したりする活動ができる「手作り」のアトラクションを用意し、それらを子どもたちが1つずつ乗り越えていくように設定した(乳児はできる範囲で参加)。これらには、低年齢からできることを実践のテーマとして、劇を見る、話を聞く、歌を歌いダンスを踊る、そして疑似体験、振り返りをするという身体活動を通じた乳幼児期における保育内容の領域「健康」や「環境」だけでなく「表現」「言葉」さらに「人間関係」に関わる内容まで領域を広範的に包含するようにし、乳幼児の未分化な発達特性を考慮した内容としている。また、園には、事前打ち合わせでは、園の特色に合わせた取り組みになることを相談している。

なお、今回は、一部山田・丁子(2016)で示したアトラクションに改良も加え、図1④⑤でのトンネルは、これまで段ボールで作られていたものを、より簡単に作りやすく軽量化し、かつ、サイズの変更が容易、トンネル内部の様子がトンネルの外から見えるようにした。実際に防災保育での体験をする前に、子どもたちの体形や心理状態などを考慮して、各種アトラクションはサイズ・明るさ等を微調整して使用し、子どもたちを過度に不安にさせないように配慮した。さらに、最初は保育者に実際にやってもらい、子どもたちに体験する活動を見せるように配慮も行った。それらのことから恐怖心から大泣きしてすべてを拒絶する子どももなく、全員がアトラクションとして用意した疑似体験活動に取り組むことができた。劇を見ている時に人形に危険を知らせる子どもがいたり、頭を守るダンゴムシのポーズが難しい子どもがいたり、揺れる台の上では真剣に身を守る姿勢をとったりなど、時に真剣な表情を見せる場面もありながら、遊びの一つとしての

挑戦と考える子どもも多く、全体的に楽しそうな雰囲気で見ることができた点は大きな成果であると考えられる。

その時の様子の写真を図2～5に示す。図2は、ペープサート劇を食い入るように見る子どもたちの姿である。内容は数分のコンパクトなものを3話用意したが、集中力が途切れることなく、見ていた。図3は、コミカルな歌とダンスでだんごむしのポーズで身を守ることを伝えるシーンで、そのポーズを理解し印象付けるためだけでなく、ここでの防災保育の活動への恐怖心や実際の地震の揺れへの怖さを軽減させることも意図している。また、歌のメロディは誰もが知る曲に歌詞をつけているため、子どもたちに馴染みやすいだけでなく、覚えてもらいやすい。図4は、「ぐらぐら台(手動の振動台)」の上で、揺れを感じたら頭を守るだんごむしのポーズをしているシーンの写真である。4名のうち3名は、後頭部に手をやり、頭を守ることを意識できているように見える。しかし、中ほどの1名は、顔を覆うもしくは、体を伏せている体勢をとっている。1歳クラスではポーズをできたことを認め、2歳以上クラスでは個々に応じて保育者が正しい手の位置を伝えるなど、年齢に応じた対応を個々にしている。こうした事例は乳幼児ではよく見られる様子であるが、頭を守ることの重要性を意識させることの一つとしてだんごむしのポーズがあるので、繰り返すことでより意識を向けさせる必要があると言える。図5は、「もくもくトンネル」をくぐっているシーンの写真である。トンネル内部は、無害の煙を薄く流しており、子どもたちが口と鼻を手で押さえながら、しかも、床を這う低い姿勢で前へ歩みを進めていることが分かる。災害時に火事が起こることを想定しているためである。こうした災害時を模擬した体験的活動について保育者や友達と共に手作りアトラクションを体験することで、恐怖心よりも興味や挑戦心を、そして、楽しさを盛り込むことで、印象付けとして極めて高い効果をもたらすものと言える。

また、これらの劇、歌やダンスを演じ見せているのは、和歌山大学教育学部生であり、教員養成として教育的効果も期待できる。

- | |
|--|
| <p>A：ペープサートによる防災劇
 B：歌とダンスによる身を守る姿勢の練習
 C：アトラクションで災害体験</p> <p>①ぐらぐら台：揺れを体験
 ②ゆらゆら壁：落下の危険物を避ける体験
 ③じゃりじゃり道：足元の危険物を避ける体験
 ④もくもくトンネル：煙の充満する空間を体験
 ⑤まっくらトンネル：暗闇を体験</p> |
|--|

図1 防災保育実践における内容の概略



図2 ペープサートによる防災劇。熱心に見入る子どもたち。劇を演じるのは和歌山大生。



図3 学生のダンスを見よう見まねで子どもたちもダンスをする様子。



図4 「ぐらぐら台」の上で揺れた際の練習(だんごむしのポーズの練習)



図5 「もくもくトンネル」で煙の中を通る体験をする様子。

- 設問① 年齢・クラス
 設問① 地震防災保育の感想
 設問② 印象に残った内容とその理由(2つまで)
 設問③ 体験的な防災保育の必要性の有無
 設問④ 今回の防災保育の改善点(気づき)

図6 保育者向けアンケートの質問項目

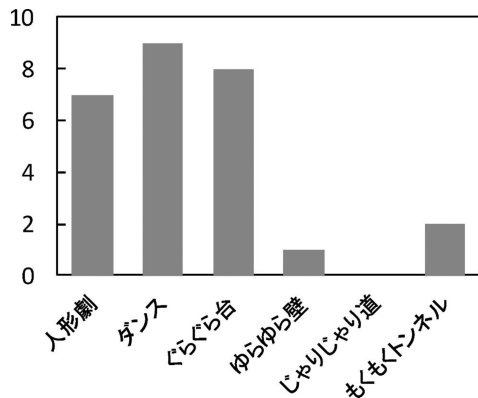


図7 保育者へのアンケート結果。印象に残ったアトラクションについての回答。縦軸は票数。

7. 防災保育実施後のアンケートから

防災保育実践終了1週間後、子どもたちの様子や防災保育実践の教育的効果を把握するために、保育者向けと保護者向けのアンケート調査を配布実施した(2歳児クラス以上の家庭に配布し、2週間後に回収した)。回答総数は、保育者から14名、保護者から25名であり、規模の小さな園であるため母数は多くないが貴重な意見が得られた(回答率は、保育者100%保護者55.6%であった)。

保育者たちは、通常の避難訓練の実施経験はあるものの、今回のような形式での防災保育は初めての経験である。この保育者たちへのアンケートは、図6の①～④の設問を設定した。設問①については、「防災について乳幼児が学ぶことができる機会はとて少ないと思うので子どもたちがとてもわかりやすく学ぶ機会がもてとても貴重な経験ができたと思いました。」「ペープサート、ダンス、実際体験してみるなど、子ども達が飽きないように内容が考えられていて良いなと思いました。ペープサートの内容もわかりやすく、良かったです。」という、現場保育者たちからは、好評であった。設問②については、全員が何らかの内容に肯定的な興味を示しており、その内訳を図7に示す。すると、「人形劇」や「ダンス」についての評価が高く、その理由として「人形劇は小さい子(0,1才児)も楽しみながら見れていたように思います。ダンスは、歌いながらすることで、子どもたちも親しみやすく、楽しんで、大事な事を学んでいたのですごく良かったと思います。」「人形劇ーうさ子ちゃんにとんたくんが出てくることで、子どもたちにも楽しくみれた。ダンスー

わかりやすい音楽で子どもたちも覚えやすかった」という回答が得られた。日常の保育の中の活動に結び付いたものについては、保育者たちの意識を引き付ける効果もあるといえる。また、「ぐらぐら台」の評価も高く、揺れる模擬体験を手軽にかつ身近なもので作られた教具が保育者(大人)たちにも強く印象に残るようで、「ぐらぐら台ー身近な素材で地震のゆれを体感できてびっくりしました。ゆらゆら壁ーブロック壁が危ないということが、子どもたちにも言葉だけでなく、身をもって学べてよかったです。」という回答であった。設問③については、100%が必要と答え、防災保育とりわけ、避難訓練だけでなく、体験的な防災教育の側面を盛り込む必要性を理解してもらえた結果であると考えられる。設問④については、「いざその時にどれだけ動けるかはわかりませんが、学ぶことで「あっ!あの時やったのや!」と思い出し行動に移すことができるかもしれません。知ること、学ぶことは年齢が小さくても、大切だと思いました。」「教室での内容を家でも話し、家庭でも話をする機会をもてることはいいと思う。」という記述が得られ、我々が意図している防災保育のねらいが、直接的に言わなくとも適切に保育者たちにも伝わっていることが分かった。こうしたコメントから園独自の防災保育へつなげるのが望まれる。

一方、当日に保護者が防災保育の参加や参観をしていない状態で終了数日後に保護者アンケートを配布し回答を得た。図8に示す項目を設定し結果を示す。設問①については、図9左(Q1)のように74%の家庭で防災への意識があることが分かる。同じ和歌山市内の公立幼稚園での結果[山田・丁子(2016)]でも、ほぼ同程度の割合であった。園の立地や周辺環境などが異なるため一概に比較することはできないが、いずれの園の地域も3割近くは、家庭で防災に関する話題が挙がっていないことも分かり、実態を把握することができる。設問②については、図9右(Q2)に示すように、7割程度の家庭で保育後に地震防災保育の話子どもから聞いたことがうかがえる。こちらは、山田・丁子(2016)の同じ設問に比べ、6ポイント低い。0～2歳クラスの参加や保護者の防災保育の参加の有無の差によるものが考えられる。内容については、「だんごむしポーズ、カードを見ながら、じゃりじゃりで足キレるんやでーと教えてくれました。ダンスも覚えておどってくれました。」「歌と身を守る体勢を実演してくれた。危険な場所を避けて歩く練習をしたこと。」など、身振りを交えた親子の会話から防災保育で教わったことが家庭に伝わっていくことが分かるだけでなく、子どもたちに印象付いた活動であったこともうかがえる。設問③については、100%のyesであるが、設問④になると全てがyesでなくなり、条件や迷いのコメントが記されており、共働きの家庭が多いためか防災に関する内容も園に任せたいという考えを持つ家庭があることが

分かる。設問⑤については、図10に記すが、(特に図中下線部)家庭での地震災害に関する考え方がわかるとともに、子どもたちの育ちの姿をうかがうことができるコメントであった。また、日ごろの備えへの保護者の気づきとしても今回の防災保育が機能したものと考えられる。全体の傾向としては、この園での実践を経て、更なる拡充や頻度の向上などが望まれていることも分かる。

設問①	年齢・クラス
設問①	これまでに地震や風水害などのもしもの時にについて家族で話し合ったことがあるか。
設問②	園で行った地震保育について、家に帰ってから子どもから話があったか。その内容も。
設問③	このような園での防災保育をもっとやった方が良いと思うか。
設問④	防災保育をするときに、家庭と園で連携して行う機会が必要だと思うか。
設問⑤	その他、気づきなど

図8 保護者向けのアンケートの質問内容

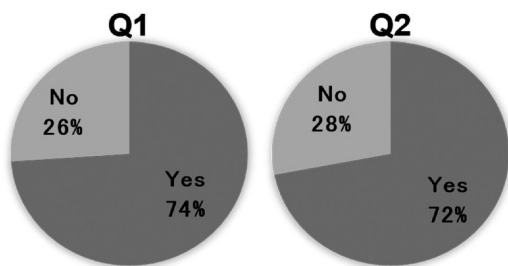


図9 保護者へのアンケート結果の一部

「大阪北部地震の時、家で揺れを経験したものの、それが地震とはわからなかった様子。でも、「地震」という言葉は知っていたので防災センターなどへ行こうかななど思っていた所でした。実際、防災保育で教えてもらうことで意識が芽生え、また年長さん達がやっていることをマネすることで「自分もやろう」という気になってくれました。それから、家族全員にだんご虫ポーズを教えてくれたので、いい機会だったなと思いました。地震がきたらオモチャを持っていきたいから、片付けもきっちりするようになりました(笑)」

「保護者側として、防災に対して認識不足な点がまだまだです。保育園での避難場所など(楠見中)分かっています。天災など予測できるものとは違い、いつ起こるか分からない地震は日頃から少しの工夫(おたより欄、毎月出る園だよりなどに固定枠を設け、避難時の情報などを毎回載せるなど)が必要であると思います。大人がパニックにならない様、子どもを守ることを考え、行動したいと(家でも)思いました。防災講習を子どもたちが体験でき、良かったと思っています。ありがとうございます。」

図10 保護者アンケート設問⑤の内容(原文まま)

8. 成果と課題～子どもたちの育ちの姿から～

以下は、西原咲子園長と終了後行った振り返りをもとに、園長の感想と子どもたちの具体的な姿と2つの事例を取り上げて成果と課題を考察する。

実践は、年度末になる2月という時期や園での実施、前日に保育者が「うきこちゃんとにゃんたくんが遊びにくる」と伝えてくれていたことで、当初から終わりまで、子どもたちは落ち着いて期待をもって話を聞くなど活動していた。西原園長は、成果と課題について、これまで園では避難経路の確保や訓練等は継続して行っていたが、ダンゴムシのポーズは練習していなかったこと、様々な場面での避難を想定して練習していなかった等など、新鮮な視点が得られたと話していた。また、今後の課題として、保育者の研修や災害時の避難場所としての準備確認、そして、想定外をなくすことを挙げた。このように、園の現状を把握し、課題を設定していく意識付けができたことは、継続的な防災対策につながる成果であると考えられる。

次に、子どもたちの具体的な姿から考察する。0歳児クラスの子どもたちは、事前打ち合わせではできる範囲での参加として担任の保育者たちが活動ごとに判断をすることになっていた。結果、当日は劇を見た後も、真っ暗なトンネルを進む「まっくらトンネル」や割れたガラスにみためたサンゴをよけて歩く「じゃりじゃり道」も特に不安な様子もなく保育者と一緒に安定して参加していた。これらは、保育者間の役割分担ができていて、保育者が責任を持って子どもの姿に合わせて活動を選択していたことによる。1・2歳児クラスは保育者と一緒に子どもなりに、3～5歳児クラスも個性豊かな子どもたちであるが、話をしっかり聞いて主体的に取り組んでいた。これらが災害時に身を守る視点に限定した全体的な防災保育の成果と課題である。

【事例1】トンネルが怖かったが挑戦できたA児

実践中において2歳と4歳クラスで煙のある「もくもくトンネル」で泣いた子どもが2名いた。そのうち、年中のA児は煙の入ったトンネルが怖かったが、挑戦しようとする気持ちもあり、その場から動こうとしなかった。すると、子どもたちが集まってきて「ちっとも怖くなかったよ」「一緒に入ろうか？」などとそれぞれに声をかけたり手を引いたりしようとしている(A児は日頃よりはじめてのことが苦手で公園のアスレチックでもできなかった幼児であったという)。その後、仲の良い子どもと保育者が紙にトンネルの図を描いて話をしたところ、意を決しトンネルに入り、出てきた後に笑顔になった。そこへ、友達が「できたね!」と声をかけ、手をつないでうれしそうに戻っていった。

これは、友達の励ましの中、A児が挑戦したいとい

う気持ちの整うのを待って説明するという保育者の援助によって、A児が協働性に支えられて自立心の育ちにつながった場面と考えられる。

【事例2】防災保育終了後に学びを伝え合う年長児

実践終了後、5歳児クラスの子どもたち数人が保育室に戻ってダンゴムシのポーズになるダンスの練習をしていた。歌詞が思い出せずに話し合っている様子を見て西原園長が歌の歌詞を子どもたちに渡した。そして、子どもたちの自主的なダンスの練習は再開され、次第に人数が増えていきクラスでの遊びになっていた。その後、振り付けはほぼ思い出せたが細部が分からないため「ダンスを教えてください」と代表の子どもが学生に頼みに来た。学生が振り付けを教えた後、年長児たちを中心に学生と何度か練習を繰り返していた。それには、「明日、小さい子たちにも教えてあげる」と年長児で話し合っていたからだという。後日、年長児が年下のクラスの子どもたちにそれぞれダンスを教えるに行っていたという報告も園長より受けている。

この事例では、防災訓練ではなく、生活の中で育ち合いを大切にする園の特色を活かした防災保育を行ったことで、子どもと保育者が共に災害時に自らの身を守るという目的を共有した。そして、年長児が年下の子どもたちにも伝えるという、子どもたちが育ち合う姿と学びを伝え合う姿が見られた。

このように、全体としては、地震防災保育において、子どもたちが災害時に身を守る方法について体験を通して経験でき、理解する様子を見ることができた。また、乳児クラスでは、保育者同士が柔軟に協力して保育する様子が見られた。これらのことから、子どもだけではなく、保育者も子どもたちも共に学び合い伝え合う姿があった。さらに、年中・年長児の事例からは、子どもの協働性から自立心の育ちや子ども主体で学びを伝え合う継続的で安全な生活をつくり出そうとする姿があったといえよう。

課題としては、今回は主には子どもへの防災保育に焦点を当てた取り組みであったが、今後は、保育者研修としての取り組みも必要になると考えている。



図11 終了後の年長児クラスの自主練習場面

9. おわりに

本報告では、育ち合い学び合う仲間づくりを特徴とする私立園における防災保育に関する実施方法や方向性へのヒントを得た。特に、育ち合いという園の特徴を活かすことで、本実践の防災保育では、子ども同士の育ち合いと子どもから子どもへ、子どもから家庭へと学びをつなぐ姿を見ることができた。また、想定される南海トラフ地震による災害が危惧される地域における、防災への認識の程度を知ることとなった。今回の実践では肯定的な意見が多かったが、他園での実践との比較など精査によって否定的な視点や問題点・気付きをさらに集約し、乳幼児等災害弱者への防災保育・教育のより適切な内容・方法を模索するとともに、地域に根付く保育園・こども園・幼稚園との連携強化もしていきたい。

謝辞

本報に関する実践は、和歌山市大谷のかぜのこ保育園の西原咲子園長をはじめとする園のみなさまの全面的なご協力により実施することができました。また、この実践は、平成29年度和歌山大学教育学部4年生(井出弥里、中務克彦、坂本茉暉)にご協力頂きました。なお、本研究は、JSPS科研費(JP16K00971およびJP19K02615)の一部を活用しました。関係者各位に記して感謝いたします。

引用文献

- 阿部真理子・目黒公郎(2005). 保育園等の防災力向上に貢献する防災ワークショップ(目黒巻WS)の提案, 生産研究, 第57巻6号, 538-542.
- 天野珠路(2017). 「園の避難訓練ガイド」, かもがわ出版, 1-93.
- 本郷一夫・加藤道代・神谷哲司・平川久美子・進藤将敏・飯島典子(2013). 東日本大震災後の保育所における対応, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第61集・第2号, 145-157.
- 石井博子・小川恵美・宮林佳子・田中哲郎(2011). 災害時の保育園の危機対応に関する研究, 保育科学研究2, 日本保育協会, 1-32.
- 地域安全学会: (http://iss.jp.net/?page_id=2823). (参照2019-8-22)
- 厚生労働省(2018). 保育所保育指針解説, フレーベル館, 194, 202-203, 322-326.
- 水田恵三(2018). 保育園・小学校における津波からの避難の事例分析, 東日本大震災特別論文集, No. 7, 11-14.
- 文部科学省(2013). 東日本大震災を受けた防災教育の展開: 防災教育のための参考資料, 1-223.
- 文部科学省(2017). 小学校学習指導要領(平成29年告示), 50-52, 105, 111, 257.
- 文部科学省(2018). 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, 88-89, 156, 165-166.
- 内閣府(2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説, フレーベル館, 231-232, 238-289, 342-346.
- 中野晋・鳥庭康代・武藤裕則・宇野宏司・金井純子(2014). 豪雨災害を対象とした保育所の業務継続のあり方, 土木学会論文集, 70巻2号, 45-52.
- 佐藤健・村山良之(2017). 釜石市内の保育園の津波に対する防

- 災管理・防災教育と東日本大震災からの教訓, 東日本大震災特別論文集 No. 6, 23-26.
- 佐々木美恵(2016). 災害下における保育者の支援者機能: 地震・放射線災害下で幼稚園教諭が実施した保育の工夫と配慮に基づいて, 埼玉学園大学心理臨床研究, 2, 1-11.
- 高橋多美子(2008). 地域と連携した幼児期における地震防災教育の普及, 保育学研究, 第46巻第2号, 163-173.
- 山田伸之・丁子かおる(2012). 乳幼児からの体験型地震防災保育プログラムの開発, 日本保育学会第65回大会, B2, 090.
- 山田伸之・丁子かおる(2016). 和歌山市立岡山幼稚園での地震防災保育についての一考察, 和歌山大学防災研究教育センター紀要, 第2号, 44-49.
- Yamada N., and K. Choji (2017). Practices of the disaster prevention education that incorporated the necessity of the kindergarten and nursery school, S23-P-07, the Joint Scientific Assembly of the IAG-IASPE.
- 山田伸之・丁子かおる(2018). 和歌山県美浜町および御坊市の保育施設における地震防災保育の実践的考察, 日本保育学会第71回大会, P-C-2-9.